クシェーメーンドラの仏教説話に見られる生死観について

山　崎　一　穂
（広　島　大　学）

1　序

本論文で考察対象とするのは，11世紀カシミールの詩人クシェーメーンドラ（990-1066）の仏教説話集 *Bodhisattvāvadānakalpalatā*（『菩薩の偉業の如意の蔓草』，以下 Av-klp）である。クシェーメーンドラは夙に知られているように，多方面の著作を残した詩人であり，処女作として二大叙事詩の要約本 *Bhāratamañjarī*（『バーラタの花束』），*Rāmāyaṇamañjarī*（『ラーマーヤナの花束』）を著している[(1)]。彼はヒンドゥー教徒であったが，仏教にも関心を持ち，当時のカシミールに伝承されていた仏教説話を韻文に改稿し，全108章から成る本作品を著した。この作品については，1888年から1918年に Sarat Chandra Das による校訂本が出版されて以来，多くの研究者によって研究がなされて来た。しかし，その大半は Av-klp の源泉資料に関するものであり，Av-klp を文学作品的見地から考察した研究は，「説話の叙述が浅薄で，均衡が取れておらず，その粗筋の要点がしばしば最小限に圧縮，寧ろ損なわれているのに対し，他方，少なくとも仏教的観点からは不必要な装飾が多く付け加えられている」という理由から，その文学的価値を高く評価しなかった Hahn［1985］以降，ほとんどなされることがなかった[(2)]。

しかし，クシェーメーンドラがAv-klpを著すにあたり，種本の仏教説話の筋を極度に要約し，それに修辞を凝らすことだけに傾倒したとする上記の評価は[(3)]，Av-klpをきわめて表面的に捉えた評価であると思われる。なぜなら，クシェーメーンドラはAv-klpの中で，しばしば人間の本性を鋭く突いた一般真理や箴言，自身の人間観を交え，種本の伝承を大胆に改編しているからである。そしてそこからは，彼が自身の翻案した説話をいかに魅力的な形で読者に提示するかを常に意識しながら，Av-klpを著していたということを明瞭に読み取ることができる。

本論は，Av-klp所収の108の説話のうち，第11章Sundarīnandāvadāna所収「スンダリー・ナンダ物語」及び，第59章Kuṇālāvadāna所収「クナーラ物語」の二説話を取り上げ，そこに見られる生と死に関する記述を中心に，Av-klpの文学作品としての再評価を試みるものである。

2　クシェーメーンドラ本「スンダリー・ナンダ物語」に見られる生死観

「スンダリー・ナンダ物語」は，世尊の異母弟難陀の出家を主題とする作品であり，馬鳴（二世紀）の*Saundarananda*（『美しき人難陀』）がその代表作として膾炙している。クシェーメーンドラ本はAv-klp第11章Sundarīnandāvadānaに見られ，anuṣṭubh韻律を基調とする151の詩節で著されている。Av-klp所収「スンダリー・ナンダ物語」を著すに当たり，クシェーメーンドラは，六世紀に編纂された漢訳の仏伝『仏本行集経』第56-57巻所収の「難陀出家因縁品」の種本とほぼ同系統の伝本を用いたと思われるが[(4)]，種本に様々な脚色を加え，妻への愛欲と離欲の間で揺れる主人公難陀の心理を緻密に描写した作品に仕上げている[(5)]。

2.1　色欲に執着する難陀を窘める世尊

クシェーメーンドラ本「スンダリー・ナンダ物語」における生死観に関する記述として，梵行に耐えられず，僧団からの逃走を試みた難陀が，世尊に窘められる場面（第75-82詩節）を挙げることができる。これに相当する『仏本行集経』の記述は次の通りである。

［仏本行集経913c8-12］

仏因此事。而説偈言

欲離叢林已得離　　従林得出還入林

汝富伽羅観此事　　従縛得脱還被縛

爾時世尊，為彼難陀。説法句已。更復勧言。長老難陀。汝常精心。於我自在法教之中。為尽諸苦。勤行梵行。

『仏本行集経』の所伝では，下線に示したように，出家したにもかかわらず，妻のもとへ戻ろうとする難陀を，世尊が森と束縛の喩えを用いて窘めたことが述べられている。それでは，これに相当するクシェーメーンドラ本の記述を見てみよう。相当する記述は次の通りである。

［Av-klp 11.75-82］

mā kṛthā viplavaṃ nanda ninditaṃ viśrutaśruta｜

vidvajjanopadiṣṭena pathā yāti pṛthagjanaḥ‖11.75‖

vivekavyastadoṣāṇāṃ viduṣāṃ śīlaśālinām｜

niḥsārasukhalobhena nākārye dhīḥ pravartate‖11.76‖

gāḍharāgagṛhītasya jugupsāyatane param｜

jaghanyakarmaṇyāsaktiḥ kiṃ lajjājananī na te‖11.77‖

yonijāḥ yonisaṃsaktāḥ stanapāḥ stanamardinaḥ |

aho bata na lajjante janmany eva layaṃ gatāḥ ‖ 11.78 ‖

sadā sajjanavarjitā jananījaghanāsaktiḥ |

saṃmohāhatacittānāṃ paśūnām eva dṛśyate ‖ 11.79 ‖

rāmāramaṇamāno 'yaṃ viramya tyajyatāṃ tvayā |

bhogaiḥ saha bhujaṅgānāṃ dṛṣṭo bhavabile kṣayah. ‖ 11.80 ‖

jaghanyā janayaty eva na kasya viratiṃ ratiḥ |

yasyāṃ bhavati paryante śvāpi nāma parāṅmukhaḥ ‖ 11.81 ‖

gṛhajālavimuktas tvaṃ kiṃ tatraivābhidhāvasi |

na hi nirgatya sāraṅgaḥ punar viśati vāgurām ‖ 11.82 ‖

(75)「学識によって名高き難陀よ[(6)]，非難される罪を犯してはならない。凡夫は賢者が教示した道を通って行く。

(76) 辯別能力によって過失を除き，品行を備え，智慧ある者の思考は，価値なきものへの楽の貪りによって，なしてはならないものに働くことはない。

(77) 爾は激しい色欲に捕えられ，嫌悪の拠り所である，悪しき行為に一層執着しているが，一体どうして〔その執着に〕羞恥を覚えないのか。

(78) 女陰より生まれながら女陰に執着する者達，乳房を吸いながら乳房を揉む者達，嗚呼，〔彼等は〕何と恥知らずなことか。〔彼等は〕生まれるや否や，破滅に赴いているのだ。

(79) 女性の臀部に執着する行為は，その心が迷妄に冒されている畜生だけに常に見られるのであって，善き人々には見られない。

(80) 爾は女性に歓びがあると思い込むのをやめ，〔そのような思い込みを〕捨てよ。**輪廻生存という穴の中に，享楽と共に，好色漢達の住居が見られる**（とぐろと共に，くちなわ達の住居が見られる）。

（81）卑しい性的快楽は，一体いかなる者に厭離の念を生ぜしめぬことがあろうか。何故なら，それ（性的快楽）が終わってしまえば，恐らく犬さえもが，顔をそむけるであろうから。

（82）爾は家という仕掛網から放たれたのに，なぜ同じ場所に向かって走って行くのか。何となれば，鹿は仕掛網を出れば，再び〔そこに〕入ることはないのだから。

『仏本行集経』に見られる森と束縛の比喩は，クシェーメーンドラ本においても，第82詩節の下線部にほぼ同内容のものが見られる。しかし，クシェーメーンドラ本では，あくまで性的快楽を求めようとする難陀を世尊が窘める言葉に，実に第76詩節から直前の81詩節までの六詩節が充てられている。うち，注目したいのは第78，80，81詩節である。

すなわち，クシェーメーンドラは第78詩節 ab 句で，若い男達の誰もが抱く願望を「女陰より生まれながら女陰に執着する（yonijāḥ yonisaṃ-saktāḥ）」「乳房を吸いながら乳房を揉む（stanapāḥ stanamardhinaḥ）」という形で直接的に表現することで，人間の生における，男達の性への執着の凄まじさについて言及しており，さらにそうした行為に耽る者を「嗚呼，何と恥知らずなことか（aho bata na lajjante）」と非難し，自身の生まれて来た場所や，自身が乳を得ていた場所に執着することの矛盾を鋭く突いている。また，第80詩節の cd 句では，クシェーメーンドラは śleṣa（double-entendre）の技巧を用い[(7)]，“bhoga” に「享楽」と「とぐろ」，“bhujaṅga” に「好色漢」と「くちなわ」の二義を掛け，「色欲にとらわれる限り，人間は輪廻生存を繰り返す」という表面上の教訓的な意味に，「とぐろを巻いたくちなわが輪廻生存の穴の中に棲みついている」という裏の意味を掛け，人間の心の内には，色欲の象徴としての，とぐろを巻いたくちなわという恐ろしい存在が潜んでいることを暗に表現していること

が知られる。さらに彼は，第81詩節 cd 句で，性的快楽（rati）の後に起こる虚無感を認識しつつも，そうした行為に走ってしまう男性の本性について触れることで，第78詩節と同様，性への執着が人間の生の中で，非常に断ち切り難いものであることを述べている。

以上の例からは，クシェーメーンドラが，表面上は色欲に走る者達を批判しつつも，実際には，人間の生において確固として存在する，女性の身体への執着の根深さを赤裸々に表現しようとしていたことを読みとることができる。

3　クシェーメーンドラ本「クナーラ物語」に見られる生死観

次に，「クナーラ物語」を見てみよう。「クナーラ物語」は，アショーカ王の息子クナーラの失明に関する因縁物語であり，説一切有部系の説話集 *Divyāvadāna*，漢訳『阿育王経』に代表される漢訳経典中に多数の類話が見られる[(8)]。クシェーメーンドラ本は，Av-klp 第59章 Kuṇālāvadāna に見られ，triṣṭubh 韻律を基調とする171の詩節で著されている。伝本的観点から見て，クシェーメーンドラはチベット大蔵経律疏部所収のアヴァダーナ，*Ku na la'i rtogs pa brjod pa*（『クナーラのアヴァダーナ』，以下 Kun）と同一祖形の伝本を種本として自身の物語を著したと思われる[(9)]。しかし，彼はこの僅か171詩節から成る物語に，「スンダリー・ナンダ物語」と同様，様々な脚色を交えている。そこで以下に，クシェーメーンドラ本と Kun の原典とを比較対照しながら，そこに見られる生死に関する記述について検討してみよう。

3.1　クナーラへの譲位を口にするアショーカ王

「クナーラ物語」に見られる，生死と最も関わりの深い記述として，息子クナーラをタクシャシラーの都城に派遣したアショーカ王が，その直後に内臓疾患に罹る場面を挙げることができる。

Kun の所伝は，アショーカの体に起こった異常な病状を細かく描いた後，彼がクナーラへの譲位の意向を口にしたことを次のように述べる。

[Kun D231a6-7; P286b2-3]

｜ de nas rgyal pos smras pa｜ku na la khug cig｜de rgyal srid la gzhag par bya ste｜kho bo yang slar 'tsho bas ci zhig bya｜

そこで，〔アショーカ〕王は言った。「クナーラを呼べ。彼を王位に就ければ，私はこれ以上生きて何になろうか。」

これに対応するクシェーメーンドラ本の記述は次の通りである。

[Av-klp 59.69-76]

vaidyaiḥ kim adyāpi nivṛttavidyair
vyathānimittaiḥ kim atathyapathyaiḥ｜
aśarmakarmopanipīḍitānāṃ
dharmopadeśapraṇayaś cikitsā‖59.69‖
kāyaḥ prayāto 'yam apāyabhūmiṃ
śalyāyate bhogagaṇo 'py abhogyaḥ｜
andhasya lāvaṇyavatīva kāntā
bhogojjhitā śrīr ghana eva śāpaḥ‖59.70‖
atyantamandāgnir api prasakta-

pradīptaśokānaladahyamānaḥ |
pravṛddhatṛṣṇo 'py anapetajāḍyaḥ
sukhī gatāsur na tu dīrgharogī ‖ 59.71 ‖
pracchannam antaḥparivarti pāpaṃ
nīcāvamānaḥ kalahānubandhī |
vyādhiḥ sthirārambhajugupsitaś ca
dīptāgnitāpena śamaṃ prayānti ‖ 59.72 ‖
kukarmaṇām eṣa vicitrarūpa-
viparyayāyāsamayo vilāsaḥ |
dāridrakaṣṭaṃ yad arogabhājāṃ
lakṣmīvatāṃ yac ca sadaiva rogaḥ ‖ 59.73 ‖
bandhyaṃ janma śarīriṇāṃ virahitaṃ buddhyā vicāreddhayā
dhig buddhiṃ na kṛtaḥ prasādhanavidhir yasyāḥ śrutenojjvalaḥ |
kiṃ tena śrutavistareṇa na gato nirdainyatāṃ yaḥ śriyā
kiṃ śrīvibhramajṛmbhitena nitarām ārogyabhogyaṃ na yat ‖ 59.74 ‖
ānīyatāṃ me tvarayā kumāraḥ
prajāpriyas takṣaśilāniyuktaḥ | paśyāmi tasmin vimale suvṛtte
saṃkrāntam ādarśa iva svarājyam ‖ 59.75 ‖
samarpitodagrasitātapatraṃ
nibaddhamauliṃ praṇayān mayaiva |
paśyantu taṃ puṇyarasāyanena
māṃ eva paurās taruṇatvam āptam ‖ 59.76 ‖

(69)「〔自分の病を治すだけの〕知識のない医師達が今さら何になろうか。苦痛の原因である誤った食が何になろうか。不幸をもたらす業に苛まれた者にとっての治療薬とは，法の教えを愛することである。

(70) この体は災厄の〔巣くう〕場と化してしまった。諸々の楽しみも楽しまれ得ず，棘と化した。楽しみのない諸々の王権など，実に絶え間なく続く呪いである。あたかも，盲人にとっての麗しい妻のように。

(71)〔身体の〕消化能力は著しく衰え，絶えず燃え続ける悲しみの火に焼かれている。〔身体の〕活力はないのに，渇愛は増している。幸せな者は死んだ者であって，長い間病む者ではない。

(72) 内にある秘められた悪，諍いに付随する卑しい蔑みの念，忍耐強い者に嫌悪される病気は，燃えている〔火葬の〕火の熱で鎮まるであろう。

(73) 悪業を背負う者達には，次のような，多様な逆境や苦難という娯楽がある。それは，健康を享受できる者達にとっては，赤貧という辛苦であり，さらにそれは，財ある者達にとっては，常に病気〔という辛苦〕である。

(74) 辯別能力によって光輝を発する知性なくして，衆生の生は無益だ。知性は何と貧しいものであることよ。もしそれが学識によって飾られもせず，燦々と輝かねば。その膨大な学識とて何になろうか。もし，それ（学識）が，富によって豊かさ（品性）を得ぬならば。富という美が開こうとて，何になろうか。もし，それ（富という美）が，残りなく健常時に楽しまれ得ぬならば。

(75) 速やかに私の王子を連れて来い。〔彼は〕タクシャシラー〔平定に〕任命されたが，臣民が愛する者だから。私は鏡に映された自らの王たる様を，あの汚れなく，行い正しい彼に見るのだ。

(76) 実に私が愛情のゆえに，高く聳える白い日傘（王の象徴）を〔彼に〕譲り渡し，王冠を結んでやれば，都城の民は彼を，福徳という錬金薬で若くなった私に他ならないと見るだろう。

Kunでは，アショーカの譲位の言葉は「クナーラを呼べ。彼を王位に就ければ，私はこれ以上生きて何になろうか。（ku na la khug cig ｜ de rgyal srid la gzhag par bya ste｜kho bo yang slar ’tsho bas ci zhig bya）」という短い一文のみである。これに対しクシェーメーンドラは，相当箇所に第75-76詩節の二詩節を充て，クナーラの人間性を次のように述べている。

- 「臣民から愛される者（prajāpriyas）」
- 「汚れなく，行い正しい者（vimale suvṛtte）」
- 「若い自分に瓜二つの者（mām eva taruṇatvam āptam）」

クシェーメーンドラはここで，クナーラの徳性について具体的に触れることで，彼がいかにアショーカの後継者に相応しい人物であるかを，明確に説明していることが知られる。また彼は，第69詩節から第74詩節までの六詩節に，Kunには見られないアショーカの言葉を挿入している点で，我々の注意を惹く。相当箇所では，アショーカが危篤状態に陥り，次第に自身の生命への執着を失っていく心理状態が，対比表現と比喩表現によって見事に表現されている。

すなわち，第70詩節では，病気のために享受できない王権（bhogojjhitā śrīr）を視覚認識されない盲人の美しい妻（andhasya lāvaṇyavatīva kāntā）に喩え，第71詩節では，旺盛な精神の働きと，衰弱していく身体とを，

身体：消化能力が著しく衰えている（atyantamandāgnir）

精神：絶えず燃え続ける悲しみの火に焼かれている（prasaktapradīpta-śokānaladahyamānaḥ）

身体：活力がない（anapetajāḍyaḥ）

精神：渇愛が増している（pravṛddhatṛṣṇo）

という形で対比的に述べることで，意欲は増す一方であるのに，身体の自由が利かず，自らの王権を享受できないアショーカのもどかしく，やりき

れない心理を描いている。また，第73詩節でも，第71詩節と同じく，cd句に対比表現を用いて，

健康を享受できる者（arogabhājām）――赤貧の苦しみ（dāridrakaṣṭam）

財を有する者（laṣmīvatām）――病気（rogaḥ）

という形で，アショーカに降りかかった業のもたらす，皮肉な結果を述べている。さらに，第74詩節では，韻律をtriṣṭubhからśārdūlavikrīḍita韻律に変え，複雑な関係代名詞構文を用いて，人間の生（janman）を価値あるものとするものは知性（buddhi）であり，知性は学識（śruti）から，学識は心の豊かさ（nirdainyatā）からもたらされるものであるが，その心の豊かさも，身体の健康が享受できなければ，無益であると述べることで，他の何にも増して自らの身体の健康を求めるアショーカの心理を巧みに描いている。そして，そこからは，知性も学識も心の豊かさも，所詮は健康なくしては役に立たないという，現代にも通じるクシェーメーンドラの生死観を垣間見ることができる。

以上の例は，クシェーメーンドラが，Kunには見られない，様々に思いを巡らし刻々と変化するアショーカの心理を描写し，それを前途有望なクナーラの姿と対比させることによって，病気を患い，死を目前にしたアショーカ王の様を一層鮮明に読者に提示しようという意図を持って，当該詩節を著していたことを示唆している。

4　結　　語

以上，Av-klp所収の二説話「スンダリー・ナンダ物語」と「クナーラ物語」から「生と死」にかかわりの深い記述を抽出し，それぞれ，クシェーメーンドラ本に最も近い伝本である漢訳『仏本行集経』及び，Kunの並

行部分と比較対照し，検討した。そこから得られる結論は次の通りである。

⑴漢訳『仏本行集経』やKunの所伝が，外面的な事実の経過を簡潔に叙述するのに対し，クシェーメーンドラは，人間の生の中に確固として存在する女性への執着についての記述（スンダリー・ナンダ物語）や，死を目前にしたアショーカ王の内面的な心理描写（クナーラ物語）に筆を費やし，しばしば自身の生死観に関する見解を交えている。

⑵上記事実は，クシェーメーンドラが，種本の仏教説話の筋を韻文に要約し，陳腐なカーヴィアの決まり文句で飾るばかりではなく，人間の生と死についての自身の鋭い視点と豊かな想像力に基づいて，独自の仏教説話を著そうとしていたことを如実に物語っている。

Av-klpについては，近年各国の研究者により，続々と新たな原典校訂と翻訳が発表されつつある。しかし，同作品を文学作品的側面から考察した研究は，未だ十分になされているとは言い難い。Av-klpの一次資料の問題を考慮するならば，確かに目下はその原典校訂，翻訳という基礎研究を充実させる段階にあるとは言えるが，これと同時並行して，Av-klpの内容に関する研究，あるいは，そこに見られる文化史に関する研究を進めていくことも，今後の課題となるであろう。

Av-klp 異読箇所一覧（Σは明示した以外の全ての写本（校訂本）がその読みを示すことを示す）

#11 Sundarīnandāvadāna

75b viśrutaśruta] conj.; hi śrutāśrutam Ed; viśutaśutaḥ DZ.

75d pathā] Ex conj. de Jong; yathā EdDZ, Tib. translates *bzhin* (yathā).

76c -lobhena] DZ (de Jong); -lābhena Ed.

77d lajjājananī] DZ (Yokochi); lajjājanane Ed; lajjājananaṃ Ex conj. de Jong.

78ab yonijāḥ yonisaṃsaktāḥ stanapāḥ stanamardinaḥ] Ex conj. Yokochi; yonijayonisaṃsaktāḥ stanapastanamardinaḥ Ed; yonijayonisaṃsaktaḥ stanapāstanamardinaḥ DZ; yonijayonisaṃsaktāḥ stanapāḥ stanamardinaḥ Ex conj. de Jong.

81d paryante śvāpi nāma] Ex conj. de Jong; paryanteṣv api naiva Ed; paryante śapi nāma DZ.

#59 Kuṇālāvadāna

69d dharmopadeśapraṇayaś] DZ (de Jong); dharmopadeśaḥ praṇayaś Σ.

72d śamaṃ prayānti] B; śamaṃ prayāti Ed; sa saṃ prayānti A; samaṃ prayānti E; samaṃ prayāntī DZ.

74a vicāreddhayā] A (de Jong)E; vicārecchayā Ed; vicārena ca B vichāredbaya DZ.

74b dhig buddhiṃ] Σ (de Jong); dhig buddhir Ed; dhig buddhi AE.

75d saṃkrāntam ādarśa iva svarājyam] Ex conj. de Jong; saṃkrāntam adyaiva kṛtaṃ svarājyam Ed; saṃkrāntaṃ ato iva svarājyaṃ A; sa_ _numato_ _svarājyaṃ B; saṃkrāntam āva svarājyaṃ E; saṃkrāntarm ādarśa iva svarājyaṃ DZ.

76b praṇayān mayaiva] EdBE; praṇoyān mayeva A; pranayān mayaiva DZ.

76d āptam] Σ; avāptaḥ A; āptaḥ E.

略号及び参考文献

Av-klp *Avadāna kalpalatā*. Ed. Sarat Chandra Das & Satis Chandra Vidyābhūṣaṇa. 2 vols., Calcutta, 1888-1918.

de Jong See de Jong 1996 & de Jong 1979.

Kāvyādarśa Daṇḍin's Poetik(Kāvjādarça). Ed. O. Böhtlingk. Leipzig, 1890.

Kun *Ku na la'i rtogs pa brjod pa*. Padmākaravarman and Rin chen bzang po Trs. Ku na la'i rtogs pa brjod pa. (Tōhoku Cat #4145, Ōtani Cat #5646)

de Jong, J. W. 1979 *Textcritical Remarks on the Bodhisattvāvadāna-kalpalatā Pallavas 42-108*. Tokyo: Reiyukai Library.

de Jong, J. W. 1996 "Notes on the Text of the Bodhisattvāvadāna-kalpalatā,"『法華文化研究』22, 1-93.

註

＊本論を著すにあたり，九州大学の岡野潔先生，片岡啓先生よりAv-klpのネパール写本(A, B, E)およびダライラマ五世版（Z）の複写を賜った。鹿児島国際大学の外薗幸一先生からは，『仏本行集経』に関する有益な御教示を賜った。また，京都大学の横地優子先生からは，Av-klpの原典の読みに対する貴重な御教示を賜った。原文の異読箇所にYokochiとあるのは先生から御教示頂いた読みを示すものである。茲に記して御礼申し上げる。

(1) 彼の著作の概要については，Dr. Sūryakānta, *Kṣemendra Studies* (Poona, 1954), 6-28を見よ。

(2) Hahn [1985: 15-16] "Kṣemendra wählte für sein Werk den epischen Stil. Es ist ganz in Versen geschrieben, und unter ihnen dominieren die einfachen Metren wie Anuṣṭubh und Upajāti. Nichtsdestotrotz finden wir auch eine ganze Reiche von schwierigeren und selteneren Metren, voll von den bereits zu bloßen Formeln erstarrten Wendungen der Kunstdichtung. Die

Darstellung der Legenden ist oberflächlich und unausgewogen, ihr Handlungskern oft auf ein Minimum reduziert, ja sogar verstümmelt, während andererseits viel unnötiges Beiwerk (zumindest aus buddhistischer Sicht) hinzugefügt ist, etwa die z. T. sehr umfangreichen Rahmenpartien." (Michael Hahn, *Der große Legendenkranz* (*Mahajjātakamālā*) (Wiesbaden, 1985), emphasis mine)

(3) Av-klp に見られる修辞法については，Martin Straube, *Prinz Sudhana und die Kinnarī* (Marburg, 2006), 35–38を見よ。

(4) T #190, 911b24–918a22. 訳者闍那崛多は，『仏本行集経』第六十巻末で，この経典を編纂するにあたり『大事』(*Mahāvastu*)，『大荘厳経』，『仏生因縁』，『釈迦牟尼仏本行』，『毘尼蔵根本』という五つの伝本に拠ったことを述べている。しかし，干潟［1954］が指摘するように，そのうちで明確に資料と断定できるものは『大事』のみである（干潟龍祥，『本生経類の思想史的研究』（東洋文庫，1954），89–90）。クシェーメーンドラ本と『仏本行集経』本の源泉資料は，闍那崛多が挙げるこれら伝本のいずれかに伝承されていたものらしい（但し，*Mahāvastu* 中にはこれに一致するものは見られない）。クシェーメーンドラ本と『仏本行集経』所伝「スンダリー・ナンダ物語」の関係については，拙稿「クシェーメーンドラ本スンダリー・ナンダ物語について」『比較論理学研究』6 (2008): 159–178を参照されたい。

(5) 「スンダリー・ナンダ物語」の諸伝本ついては，Covill［2009］による詳細な報告がある。同氏はクシェーメーンドラ本を「非常に成熟したカーヴィアの形をとった伝本」として紹介し，同本と『仏本行集経』の所伝に等しく「習気の喩え」に関する記述（Av-klp 11.93–94，『仏本行集経』914c8–9, 25–26）が見られることを指摘する（Linda Covill, *A Metaphorical Study of Saundarananda* (Delhi, 2009), 57–70, 283–286）。

(6) 校訂本では該当箇所は "hi śrutāśrutam" となっているが，これでは意味が通じない。そこで，デルゲ版，およびダライラマ五世版の音写梵文（viśutaśutaḥ）から，該当箇所を "viśrutaśruta" にかえて読む。但し，該当箇所のチベット訳が破損しているため，"viśrutaśruta" を「学識によって名高き者」と読むか，「名高き者達の中でも名高き者」，あるいは「学識ある者達に名を知られている者」と読むかは文脈から判断し難い。

(7) 七世紀の詩論家 Daṇḍin は śleṣa を次のように定義する。*Kāvyādarśa* 2. 310ab: śliṣṭam iṣṭam anekārtham ekarūpānvitaṃ vacaḥ｜（「一つの形を備えた言葉が，複数の意味を持つ時，〔それは〕掛詞（śliṣṭa）と認められる。」）

(8)　クナーラ物語の梗概については，岩本裕,『仏教説話の源流と展開』(開明書院，1978), 195-210を参照されたい。物語の諸伝本については松村淳子氏による詳細な報告がある（松村淳子,「ジャイナ所伝クナーラ物語」『仏教研究』14（1984): 63-88)。チベット伝本については岡本健資氏による和訳が（岡本健資,「クナーラ王子の物語―Ku na la'i rtogs pa brjod pa 試訳(1)―(2)」『インド学チベット学研究』4-6（1999-2001): 78-102, 98-116)，クシェーメーンドラ本については，引田弘道氏による和訳が発表されている（引田弘道,「クナーラ物語（その一）―（その二)」『人間文化』21-22　(2006-2007): 152-178, 227-244)。

(9)　クシェーメーンドラ本とチベット伝本との関係については，拙稿「クシェーメーンドラ本クナーラ・アヴァダーナについて」『印度学仏教学研究』55-1 (2007): 294-297を参照されたい。